来さのせえ
奥多摩
《第44号》
平成29年1月15日
(一社)奥多摩観光協会

日原の日の出　画・大澤　新次

今年は雲取山に行こう

今年は雲取山だ。そう「2017」なのだ。私が初めて雲取山に登ったのは、今から40数年前、秋の終わりのころ、高校生の時だった。当時氷川中学校（現奥多摩中学校）の敷地の一部に都立多摩高等学校の定時制があった。そこで英語の教師をしていたO先生に誘っていただき、私は多摩高校の女生徒のみなさんと同行させていただいた。今では富士登山以外あまり聞かないが、それは夜間登山だった。鴨沢を出発したのは、日もとっぷりくれてからで真っ暗闇の中を登り始めた。星空の美しさが半端でなく、これまで見た中で一番すごいと思ったのを覚えている。

暗闇の中の登山は、意外と疲れることなく、その夜の宿泊地、七ツ石小屋に到着した。翌朝は先生が朝食を用意してくれて、9時ごろ七ツ石小屋を出発。遅い出発に私はちょっと心配した。

下りの石尾根は、天気にも恵まれ、気持ちの良い雲上散歩だった。しかし朝のスタートが遅かったうえ、一年でも日が短い時期であり、小袖乗越の前で日もとっぷり暮れてしまった。おまけに留浦発の奥多摩駅行きの終バスに間に合うかどうか、微妙なところで、O先生は私に、バスの運転手に少し待ってくれるように、と頼んできてくれと言われ、私は小袖乗越の前から転げるように下り、留浦まで走った。そしてなんとか、みな終バスには間に合うことができた。私の雲取山の最初の思い出である。

奥多摩観光協会主催で「雲取タイムトライアル」を約30年前に10年間に渡って行ってきた。当時協会の理事だった私は、毎年スタッフとして参加していた。大会前日に役場の山岳部の人達と一緒に奥多摩小屋に入り、その夜は大宴会、翌朝はそれぞれのチェックポイントに散っていった。選手は100名（限定）で朝8時留浦スタート、鴨沢から雲取山頂、石尾根を七ツ石山、鷹ノ巣山、六ツ石山を経て、三河屋旅館前がゴールであった。トップランナーは3時間10分前後だったと記憶している。

私が担当したのは鷹ノ巣山のチェックポイントが多かった。朝5時過ぎには奥多摩小屋を出発、7時には鷹ノ巣山避難小屋に入り準備をした。秋の早い時期だったが、1000メートルを超える石尾根の紅葉は美しく、天気さえよければ最高であった。

選手が、みな通過した後、それぞれのチェックポイントから合流したスタッフと夕闇迫る石尾根を静かに下っていった。雲取山の思い出の一つである。

そう、今年は雲取山なのだ。

（一社）奥多摩観光協会　会長　原島　俊二

～とっておきの雲取山～

「雲取山の思い出」

私は、昭和５６年に役場に就職し、すぐに先輩に誘われ「奥多摩町役場山岳会」に入部しました。

そしてその夏、初めて雲取山に登って以降、数えられないくらい登ってきましたが、忘れられない登山が３回あります。１つ目は昭和５９年の奥多摩小屋２５周年記念で、この時は、日本酒の一斗樽を背負って登ったのですが、せっかちな先輩がいてほとんど休憩せずに登らされた苦しかった記憶。２つ目は２月初旬大雪の積もる中、日原から唐松谷をラッセルしながら１２時間掛け、登った記憶。３つ目は、皇太子殿下のご案内をさせていただき緊張した記憶。

いずれの記憶も、今となっては楽しかった思い出として、ふとした時間に蘇ってきます。

先日、奥多摩小屋の清掃のため、久しぶりに雲取山に登りましたが、石尾根は今も変わることなく（当たり前ですが）幅広く開けた尾根筋の縦走路で、南側には丹沢山系越しに富士山が望め、西側には遠く南アルプスの山々を望むことができ、改めて「すばらしい眺望の気持ちの良い道だな」と実感したところです。

さて、ここ数年、第二次登山ブームとなっており、週末を中心に奥多摩駅前は色鮮やかな登山ファッションに身を包んだ山ガールや中高年の方など、多くの登山客で賑わいを見せております。このブームは、ストレスの多い現代社会において、人々が「癒し」や「やすらぎ」の場を求めた結果、起ったものではないかと思っています。登山によって心身ともにリフレッシュすることは、ご自身は勿論、町や社会全体にとっても非常に良いことだと思っております。そうした中、昨年は１６番目の国民の祝日として「山の日」が施行されました。町では「選べる山の日イベント」として各種団体の協力のもと実施しました。そして、今年は２０１７年、雲取山の標高２０１７mと同じですので、雲取山でのイベントを様々な団体のご協力のもと実施する計画ですので、是非皆様お楽しみにしていただきたいと思います。終りに、今年一年登山者皆様が事故なく、町の山を楽しんでいただけますことを祈念しております。

（奥多摩町 観光産業課長 原島 滋隆）

「いざ！2017mの雲取山へ」

今年、2017年は、標高2017mの雲取山の輝かしい年です。この記念の年に、雲取山は多くの方々に楽しんで頂きたいとお待ちしています。

雲取山について吉田東吾博士は「大日本地名辞書」の中で「坂東山系！その天そそる山なみの主脈は所謂奥秩父の山々だ。その奥秩父の掉尾（とうび）の一振二千米最後の弩級艦が、また我が奥多摩の山々の総帥でもある雲採山なのである」と述べられています。（何故か“雲採山”です）では、奥多摩の総帥である雲取山を目指して出発しましょう。

多くの登山道がありますが、鴨沢から登り、峰谷へ降りるコースが一般的です。鴨沢から旧名称小袖乗越の権現平へ。ここから堂所までは緩やかな登りです。七ッ石小屋分岐地を経てブナ坂に着くと視界の広がる石尾根です。富士山を眺めながら奥多摩小屋へ。この先二か所の急登で小雲取山下に出ると、雲取山が目の前に聳えています。雲取山山頂からの360°の景観は、人それぞれが自分の想いを込めて眺めて下さい。“これが山荘”と設備の整った雲取山荘に驚き、一夜を過ごして翌早朝、雲取山で日の出を拝み、朝食後下山です。ブナ坂まで折り返して七ッ石山登頂。下りの将門を祀るといわれる七ッ石明神は、七人の武者（大岩）に守られています。ここから己ノ戸の大クビレまでは尾根道と水道局の管理歩道(巡視道）とがあります。千本ツツジまで尾根道を歩き、その先は管理歩道に降りてゆっくり眺めを楽しみながら歩くこともよいでしょう。避難小屋から鷹ノ巣山へは往復します。浅間尾根を下り、浅間神社を過ぎると奥の集落。ここから車道を交差する山道を下って峰谷に降ります。ここで、七ッ石山・鷹ノ巣山を仲間とした雲取山登頂を、無事終了しました。

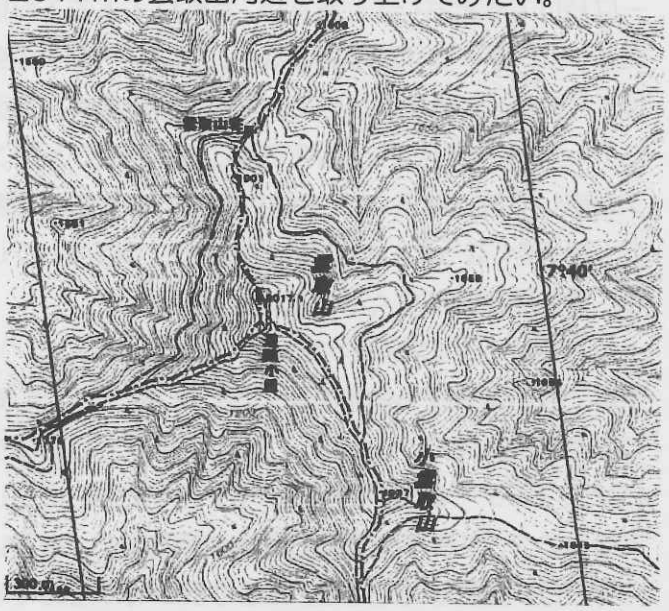
冬場の雲取山は、この輝かしい年に多くの皆さんとの出会いを楽しみに、静かに待っていることでしょう。

（高野 義男）

2017年奥多摩山歩き
～ワンポイントアドバイス～

謹賀新年。今年は雲取山にとってその標高と同じ記念すべき年。奥多摩友の会の皆さんには、登頂を目指してこれからトレーニングに励み、今年度の目標のひとつとされたい。

今回はこの記念すべき年に因み、標高が同じ2017mの雲取山周辺を取り上げてみたい。



(図：2万5千分の1地形図から雲取山周辺を抜粋)

山頂周辺の登山道は点線で示され、山頂の東側を取り巻くようにつけられているものと、一点鎖線で示す都県界に沿って山頂を通過するルートがある。

小雲取山から雲取山荘に向かう場合、山頂を経由する後者のルートは、前者のそれに比べて距離こそ短いが、標高差がある。また、山荘(■で示す)のある位置の標高は、凡そ1,830mである。この地形図からはこうしたことをも読み取って欲しい。

次に、初めて雲取山に登り山荘で宿泊することを考えてみよう。雨天で西風が強く吹き荒れてきた場合、果たして頂上を通過するルートの選択がベストであろうか。

こうしたことは地形図だけからは判断できない。前々回までこのシリーズで取り上げてきた予想天気図の読解はもちろん、経験者と同行するか又は、宿泊する山小屋の人から充分な情報を事前に入手しておきたい。

ところで右の写真は、雲取山の頂上に新たに設置された標柱である。この標柱は従来のものと大きく異なる点が二つある。その一つは、設置者が東京都と埼玉県の両者共同で建てられたものである。雲取山の頂上には、上の地形図からも分かるように都県境を示す一点鎖線がちょうど山頂を通過している。

そこで従来から両都県によって設置されていた木製標柱をそれぞれ撤去し、新たに両自治体の共同によって設置されたものである。もう一つは木製ではなく、これを機会に磨き上げられた石材で頑丈に造られていることである。

次に、標柱の右下にみえるコンクリート製の四角な構築物は、正確な標高（2017,1m）を示す国土地理院の雲取山一等三角点である。

ところで昨年は11月中に東京地方で積雪を観測した。これは今までには記録のないことで、気象庁でも驚いている。俗説によると関東地方で初雪の降るのが早い年は冬に暖かく、度々降雪に見舞われると云う。

例年1月中旬から4月上旬までの雲取山登山では六本爪以上のアイゼンを携行するよう呼びかけている。平成26年2月の豪雪では、一カ月以上にわたって雲取山荘までのトレースはなかった。それでも山荘の管理人は豪雪と戦っていた。

雪解けの春が来ても北斜面の日陰には黒氷が残り、アイゼンを手放せない。

(雲取山山頂に新たに設置された標柱)

友の会の皆さんにおかれては冬の間は安全な低山でのトレーニングを重ね、3月初旬に発表される新年度のスケジュールにあわせ、自身の力量に応じた奥多摩の山歩きを楽しまれたい。

自分の今居る位置を地形図で確認し、また気象の変化を天気図と観天望気によって予想できる自立型の登山者を目指し、今年も100倍楽しむ山歩きにしよう。

(冨士　光男)

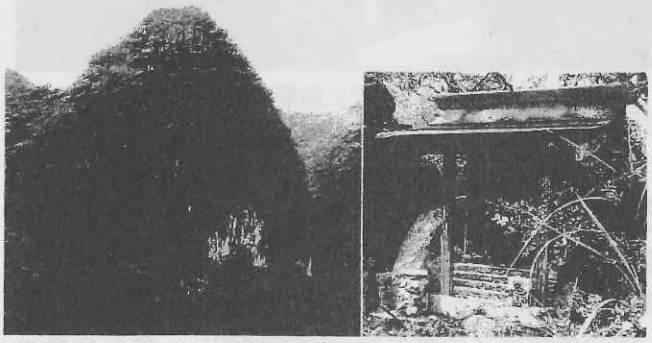
2017年奥多摩山岳事故ゼロをめざして　　山岳遭難事故事例

（事例１）　「役場の駐車場に車を置いたまま、行方不明の人がいるらしい」という情報が私の耳に入ってきました。９月24日、Ａさん（33歳男性）の叔父が奥多摩町役場の駐車場に本人の車があるのを発見、奥多摩交番に届けた。25日、山岳救助隊は本仁田山から川苔山付近を捜索したが発見できなかった。

その後、タクシーの運転手の情報によりそれらしい青年を乗せたということがわかった。駐車場に車を置いた時間とタクシーに乗った時間などからＡさんに間違いないだろう、タクシーの運転手はＡさんが日原から鷹ノ巣山へ行くと言っていたという。警察は稲村岩周辺を重点に捜索した。又、都山岳連盟の捜索隊は下山ルートの石尾根、不老林道、三ノ木戸周辺を捜索するも発見できなかった。

Ａさんは最近山登りが好きになり、先日も高尾山に登った。今回２度目の初心者で、本当に鷹ノ巣山に登るつもりだったのでしょうか？あくまでも私の予想ですが、Ａさんは車を置いてタクシーで日原まで来た。雨は降っているので鷹ノ巣山は無理だと思った。目の前に大きな岩山が見える。稲村岩だ。あそこまでなら水も食料も無くてすぐ帰れるだろう。あそこまで行ってみよう。と思い登り始めた。そして稲村岩の分岐から岩の上に出た。そこで何かがあって岩から滑落した。29日稲村岩の下、鷹ノ巣谷で発見された。

稲村岩と山頂の祠に供えてあったお酒



（事例２）　９月24日、ハイキングのツアーグループ（10名うち２名がガイド）に参加したＢさん60代女性、奥多摩駅からバスで峰谷まで行き峰谷林道から日蔭名栗山を目指して日蔭名栗南尾根ルートを登った。1200m付近に来たとき両方の足がつってしまって動けなくなった。グループのリーダーは女性１人で下山することを決めた。女性もみんなに迷惑にならないように「大丈夫です。ゆっくり下りますからツアーは続けてください」と言った。女性は１人で下り始めた。リーダーはやはり気になり、サブリーダーの男性（７０代）に後を追わせた。２人は合流し峰谷方面に下った。しばらく下った所で道に迷い男性がバランスを崩して谷へ滑落した。女性は救助に行ったが重傷だった。暗くなったし動けないのでそこでビバークした。男性は夜中に亡くなった。

一方グループの方はやはり２人の行方が気になり、予定では石尾根から奥多摩駅に行くはずだったが、同じ道を峰谷方面に下山した。とっくに帰っているはずのサブリーダーの男性と連絡が取れず、家にも帰宅してないので、午後７時警察に捜索依頼をした。夜遅いので翌日、捜索を開始した。女性は夜が明けたので単独で下山し峰谷林道で捜索隊と合流救助された。

（事例３）10月24日、Ｃさん67歳男性、最近はウォーキングを手始めに、山にも登り始めていた。

当日、11時45分ごろの御嶽滝本駅からケーブルカーに乗った。そして、大岳山を目指した。大岳山についたのは午後３時ごろ、鋸山についたのは多分午後４時すぎではなかったのか。10月の末になると日も短くなり、鋸尾根を下ったころには暗くなっていたと思われる。ライトは持っていなかったので、明かりは携帯電話でとっていた。11月５日　非番の奥多摩消防署の署員が、愛宕神社の五重塔から20mぐらい下、Ｃさんが倒れていたのを発見した。Ｃさんは鋸尾根を下り登計の林道まで来ていた。そこから奥多摩駅に林道を歩いていればこんなことにならなかったのに、なぜ暗い中愛宕神社の方に行ったのか？

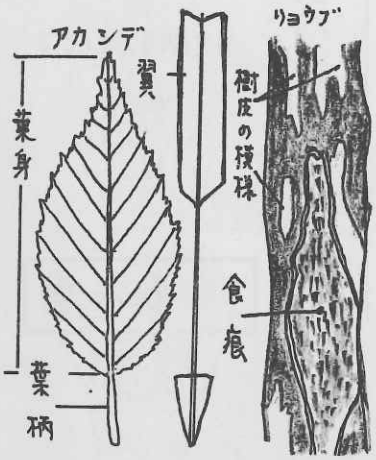
昨年は奥多摩での重大山岳事故が多く発生しました。今年こそ確実な計画、登山計画書の提出、雨具、ヘッドランプ、地図、コンパスの所持、そして何よりも、「道に迷ったら元の場所まで引き返す」その基本を今一度確認しましょう。安全な登山のために。

（小峰　一郎）

奥多摩樹木雑考

冬の森で二題

残り少なくなった枯葉をふるわせながら、孤々と立たずむ木々。その中にはシカの食害を受けて、樹皮に痛々しい傷あとを残しているものもあります。食害は冬に多く発生します。それは冬には草が枯れ、草食動物の餌がなくなることが大きな要因です。そのほか樹皮は冬期もっとも甘くなっていて、それがシカを誘うのです。樹皮が甘くなるのは、樹木が冬期、からだを凍りにくくするため、体をつくっている細胞の液に糖をふだんより多く溶かし、細胞の液を濃くしているからです。ちなみに、食害を受けたリョウブの小枝をかじってみましたが、甘いとは感じませんでしたが強いにが味はありませんでした。冬は病害虫が少ないので、抗菌物質が少ないからでしょうか。ともかく樹皮の内側に、水分や養分が通る管をもつ樹木にとっては、食害は死活問題です。傷あとから病虫害も入りやすくなります。そのためか、古い傷あとでは、それを塞ぐかのような組織の盛り上がりを見ることができます。樹木のけなげな自己治癒のすがたです。



いやな光景を目にしたあと、ふと足元を見ると面白い現象に気がつくことがあります。よく乾いた風通しの良い森の道で、たくさんの落ち葉が申し合わせたように、葉柄を同じ方向に向けて横たわっているのです。これは、落葉が風向計と似た形をしているからです。（葉柄が風向計の矢の軸、葉身が風向計の翼）。私は風が強い日、目の前で落ち葉がくるくる回りながら、最後は風上に柄を向けて、ツツーッと滑っていくのを路地で見たことがあります。町中でも道路が乾いていていれば、落葉の格好から、昨夜吹いた風向きを知ることができます。

食害は困ったことで、何とか防がなければいけない課題ですが、食害にしろ、風の中の落ち葉にしろ、自然は成るがままにうごいているのだなと、あらためて思いました。

（橋上　一彦）

奥多摩の野鳥

北方からの使者　　冬鳥たち

厳しい冬の奥多摩で懸命に生きている野鳥たちがいます。

- ルリビタキ、アオジ、ホオジロ、ウグイスなど山地から里へ生活の場所を移した野鳥（漂鳥）たち。
- アオゲラ、ヒガラ、コガラ、シジュウカラ、エナガ、カワラヒワなど生活の場をあまり変えない野鳥(留鳥)たち。
- はるばる北方から日本列島へ、そして奥多摩へ渡って来たジョウビタキ、ツグミ、シロハラ、カシラダカ、マヒワ、ミヤマホオジロなど（冬鳥）

以上の鳥たちが今懸命に餌を求め活動しています。木の実や地上から姿を消した昆虫などを探しながら…

大澤新次　画

今回は冬鳥でホオジロの仲間のミヤマホオジロを取り上げてみました。

ミヤマホオジロは顔の黄色と黒の配色、頭の冠羽が特徴で大きさはスズメ位でスズメに似るが、尾羽はやや長めで、スズメよりスマートに見える美しい鳥です。地鳴きはチッチッ。

中国北東部・中部・朝鮮半島で繁殖し、日本では冬鳥として全国に飛来し、単独行動が多い。

明るい林、農耕地、草地などで見かける事が多い。本種は少し開けた場所で見ることが出来るので比較的見つけやすい野鳥ですが、残念ながら個体数が少ないようです。

ただホオジロの仲間では非常にカラフルな美しい鳥なので、冬枯れの里山で見つけた時の感激はひとしおです。

冬の奥多摩は寒さが厳しいですが落葉樹は葉を落としています。そのためまわりの見通しがよく野鳥たちを見つけやすいのでバードウォッチングには最適のシーズンです。あたたかくして奥多摩でバードウォッチングを楽しみましょう。

（畑　幸夫）

平成２９年度　イベントカレンダー
～ イベント案内　～

２９年度イベントカレンダーは只今作成中です。２０１７年雲取山の年（標高 2017m雲取山）にちなんで、楽しいコースを検討しています。今年も大勢の皆さんの参加をお待ちしています。

日本には自然を描写する言葉、季節を表した言葉など、自然にまつわる言葉が数多くあります。

三寒四温（さんかんしおん）

「寒い日が３日続いたら４日目には暖かくなる」

という意味で使っていませんか？　本来は、冬の天気の７日間周期を伝える言葉なんです。

「三日四日続いて寒ければ、その次にはまた、そのくらいの間暖かさが続くと言うふうに、寒さと暖かさがほとんど規則正しく交替することを三寒四温と言うそうです」冬の気候を表す言葉で日本では、冬の間に１回出番があるかどうかだそうです。

奥多摩クマ情報

１０月１９日午前０時５０分ごろ、観光案内所の矢作さんが(写真提供)ツキノワグマと遭遇しました。友人と車で奥多摩駅の方から城山トンネルに向かって走行中、つきどめ橋の上を悠々と歩いていたそうです。この後ツキノワグマは橋を渡り切り、二見釣り堀の方へと行って暗闇の中に消えてしまいました。このようなシチュエーションでなら会ってみたいですねぇ。

その後、10 月 21 日に青梅市日向和田駅近くの「奥多摩 釜めし」での冷蔵庫荒らし、釜の淵と成木などで捕獲、御岳渓谷での親子３頭の目撃など多く出没しています。冬でも安心できません。

昨年は、１月９日から目撃されています。皆さん十分注意しましょう。

奥多摩地域情報局

２月１８日～３月　３日　ひな人形展　文化会館
３月　５日　川野車人形　　川野生活館　１３時～
３月１２日　川野車人形　　水と緑のふれあい館
４月２９日　小丹波のおはやし　　古里熊野神社
４月２９日　奥多摩セラピーウォーク　自由参加
５月　５日　八雲神社獅子舞　　川井八雲神社

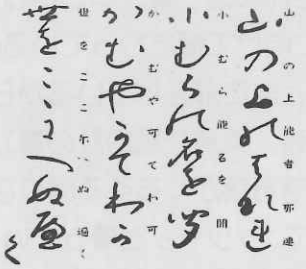
奥多摩町のイメージキャラクター「わさぴー」が LINE スタンプになりました。120 円で購入できます。

全部で 40 種類のスタンプいろいろなシーンで使えます。
お問い合わせは　町企画財政課　0428（83）2360

奥多摩の方言　これ何のこと？

- ありんどう
- おこさま

前前号の答え　「チョロッケ」　トカゲのことでした。



むかし道　川合玉堂の歌碑について
前号掲載しました川合玉堂の歌碑について訂正がありました。
正しくは左図の通りです。
（小峰　一郎）

次号発行予定：平成 29 年４月 15 日

発行　一般社団法人 奥多摩観光協会
住所　〒198-0212　奥多摩町氷川 210
電話　0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
編集　名人・達人観光ガイドの会